2016年(平成28年)12月26日 月曜日 朝日新聞 (夕刊)

認知症、VRで体験

患者が脚本 ケーブルが蛇に

自分が今どこにいるか分からない。いないはずの人が立っているように見える――。こうした認知症の人の症状を体験できるバーチャルリアリティー（VR、仮想現実）の映像を、千葉県浦安市の会社が作って体験会を開いている。認知症の人への理解を深めてもらいたいとの願いからで、社員研修に採り入れる会社も出てきた。

「わぁー」。VRの映像を映すゴーグル型機器とヘッドホンをつけた若者たちが、板でつくった段から下りようとした瞬間、悲鳴を上げた。映し出されていたのは、3階建ての建物の屋上から落とされそうになる場面。落ちたと思った瞬間、ワゴン車の後部座席から降りた場面に変わった。

10月末、千葉県船橋市のサービス付き高齢者向け住宅「銀木犀（ぎんもくせい）」であったVR体験会に、慶応大商学部のゼミ生12人が参加した。体験会を開いたのは銀木犀を首都圏で展開する「シルバーウッド」。屋上の場面は、認知症の人が送迎のワゴン車から降りるのを怖がっていた様子を元に、物体の位置関係が分からなくなる症状を再現した。

同社がVR映像を作ったのは、下河原忠道社長(45)のアイデアだ。

認知症になると「何も分からなくなる」といった世間の誤解や偏見を感じていた。「認知症の人は特別な人ではなく、私たちと『地続きの仲間』。認知症の人へのまなざしを変え、差別されず住みやすい社会にしたい」。VRなら認知症でない人との隔たりを埋められるのでは、と考えた。

3作目までの脚本は、介護施設の職員だった人が作ってきた。ないものが見える幻視の症状が特徴の「レビー小体型認知症」（レビー小体病）がテーマの最新作では、初めてこのタイプの認知症と診断されている本人の樋口直美さん(54)に頼んだ。

家に入ると玄関に帽子をかぶった知らない女性が立っているが、実は帽子かけがそう見えていた。スマホの近くにヘビがいたが実は充電ケーブルだった――。樋口さんは1カ月かけてこんな脚本をつくった。

11月下旬に完成。映像は自分で見える通りに再現されたといい、「幻視は、患者の妄想や錯乱と異常視されてきた。本物にしか見えないものへの正常な反応ということを、理解してもらえたら」と期待する。

体験会は、希望に応じて開いている。口コミで評判が広がり、最初の作品ができた今年5月から半年で、約1千人が参加。体験会を研修に採り入れる医療法人や会社もある。

体験会は企業向けは有料で、学生や市民向けは無料。問い合わせは、メール（VR@silverwood.co.jp）へ。

（久永隆一）

VR映像で認知症を体験する仕組み